

ドリーム講義室

早稲田大学 研究院教授・建築学
松村 秀一
Shuichi Matsumura

大工の正やん来たる

二〇二三年三月末か四月初め、東京大学を辞めて早稲田大学に移る時期だったと思う。東京大学大学院新領域創成科学研究科の岡部明子教授からとても魅力的なお誘いをいただいた。学生の設計課題を「アフターダブル施工」というものにしたのだけれど、学生は施工についてはそれほど知識も問題意識もないと思うので、シンポジウムのような授業を仕組んでみた。そこに登壇してほしいというのだ。

他に登壇する顔ぶれがとても魅力的だった。「施工をプロから解き放つと、建築が変わる、まちが変わ

る」という副題に関係して、長年学生とのDIY施工に取り組んでいる大阪公立大学の西野雄一郎さん、元々屋根施工から始めて今は設計事務所と工務店を経営している黒澤健一さん、「旅する大工」のいとうともひささん、そして何と言っても目玉は日本建築界随一のユーチューバーで、これまで人前での行

事には一切出たことのなかった「大工の正やん」親子。大工の正やんについては、数年前に本連載でも取り上げたことがあるが、ユーチューバーとしての人気はあの頃よりも一層高まり、今や日本語版と英語版を合わせてチャンネル登録者数は五〇万人にも達している。この数は建築界のなかでは

頭抜けている。その大工の正やんその人と、私の古巣東京大学の教室でお目にかかるのである。岡部先生のお誘いを断ることなど考えられなかった。

築九〇年の教室

教室がまた素晴らしい。鹿島建設の寄付などによって、最新の様々な映像・音響技術が駆使できる未来型の教室に生まれ変わった伝統ある階段教室である。

この階段教室は、主に社会基盤学科と建築学科が拠点を置く工学部一号館に、一九三五年の創建当初から備わっていた教室であり、九〇年

近くになるその歴史のなかで、内田祥三、武藤清、丹下健三といった著名な先生方が講義を行ってきたし、岡部先生や私もそうだが、様々な世代の多くの建築関係者が受講してきた教室でもある。だからこそ、ここで未来型の「ドリーム講義室」を実現しようとしたのである。

この教室の改修工事が無事終わった折に、デザインを統括した建築学専攻の千葉学教授の話をお聞きしたが、この教室特有の歴史を大切にしながら、見えないところに様々な最新設備を装備し、凄い技術を駆使しながらも、学生たちはごく自然に学ぶことができる、そんな場を実現しようとしたのだという。そのため、目に見えないところで様々な苦勞したとのことであった。

「アフターダブル施工」の時の写真をご覧いただいても、この千葉先生たちの創意と苦勞の一端は感じただけなのではないかと思う。

写真では一部しか写っていないが、天井全面には細くて目立たないグリッド状の照明器具が配され、様々な制御が部分部分異なるパ



岡部教授によるシンポジウム形式の授業。登壇者左端に岡部教授、二人おいて大工の正やん、そして白い上着の筆者。(写真:東京大学岡部明子研究室)

ターンで実施できるようにになっている。このグリッドには各種センサーも仕掛けられている。

かつて黒板であったところに配された大画面に対しては、複数の投影装置が対応しており、パソコンを何台も使うような複雑でアーティスティックなプレゼンテーションもできるし、学生側のパソコンなどをつなぎ、双方向のコミュニケーションがバイジュアルに成立もする。階段状の座席は踏襲されている

が、現在の人間工学上の知見に応じて、ゆったりとした勾配に変わっている。また、少し高いところにある。また、教える側の権威を示すかのようだった教壇は取り払えるようになっており、写真の通り、全体にフラットでリラククスしたコミュニケーションが成り立つ場に仕立て直されている。

「ドリーム講義室」とは呼んでいないが、パッと見ただけではそう見えないところが良い。

利用の構想力

このドリーム講義室をドリーム講義室たらしめるのは、ここで一体どんな講義や演習をするのか、使う教員や学生の利用の構想力である。

今回は「大工の正やん、東大に来たる」というだけで、私にとってはドリームだったから、これは改修以前の階段教室でもドリーム授業になっただろうが、とても親密なシンポジウムになったのは、照明やスクリーンや、講演する側と受講者側の距離感や高低差のお陰かもしれないし、そもそも岡部先生が今回の会場にこの場所を選んだのも改修後の様子を知っていたことだったかもしれない。

本当はこの教室、私自身の最終講義で使ってみたかったのだが、残念ながら二〇二三年二月末には工事が完了していなかった。ご縁がなかったと思っていたところに、今回は岡部先生に飛び切りの機会を与えていただいた。感謝しきりである。